

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第二11:1～6 「神の熱心」

[1] 「私の少しばかりの愚かさをこらえていただきたいと思います。いや、あなたがたはこらえているのです」

パウロは10章では偽教師たちのように自分を誇ったり推薦したりはしないと書いた。しかしこの箇所では彼もあえて愚かになって自分を誇り、推薦していく。なぜそのような矛盾したことをするのか。それは彼がコリント教会の兄弟姉妹たちのことを熱心に思っていたからであり、誤った考え方から脱出させたいからであった。それで彼もあえて愚かになって、偽教師たちと張り合う覚悟であり、私の少しばかりの愚かさをこらえてほしいと願うのである。

[2] 「というのも、私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な花嫁として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです」

神はコリント教会の人たちを愛し、心配し、何とかして正しい道に引き戻そうと熱心に願っておられる。それはまたパウロも願うところであり、彼はその神の熱心をもってコリント人たちのことを思い、語りかける。当時ユダヤでは娘の結婚に関して最終的に決定を下す権限は父親にあった。ここではコリント人たちの救いに導いた、言わば霊の父親であるパウロが彼ら、すなわちコリント教会を、ひとりの夫であるキリストの花嫁とする決断を下したという意味である。

[3] 「しかし、蛇が悪巧みによってエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあってはと、私は心配しています」

蛇がエバを欺いたというのは創世記3章に書かれている悪魔の誘惑による人間の墮落の記事。これによって人間は神の前に罪ある者、死すべき者となり、この世界は呪われたものとなった。パウロは、同様にコリント教会に入り込んだ偽教師たちによって、純真な教会員たちの思いや真実さが汚され、失われてしまうのではないかと心配している。

[4] 「というのは、ある人が来て、私たちの宣べ伝えなかった別のイエスを宣べ伝えたり、あるいはあなたがたが、前に受けたことのない異なった霊を受けたり、受け入れたことのない異なった福音を受けたりするときも、あなたがたはみごとにこらえているからです」

ここで言う「別のイエス」とはイエスが神であること、死よりよみがえられたこと、十字架による人類の罪の贖いなどを取り去った単なる人間イエスのことを指す。

「異なった霊」とは聖霊ではなく、人を束縛し、恐怖を与える霊、臆病の霊、律法主義の霊、また悪霊のことであろう。「異なった福音」とはキリストの恵みにより信仰によってのみ、救われるという教えではなく、救われるために何かの儀式を守ること、努力して良い行いを積極的に積むことなどが条件とされているものである。しかし、コリント人たちはそれらをおとなしく受け入れていたという。さらに、

「あなたがたはみごとにこらえている」とパウロは言う。これは実は辛辣な皮肉であり、本当は「よくもそんなこらえることのできないことをこらえていますね」という意味で言っているのである。

[5-6]「私は自分をあの大使徒たちに少しでも劣っているとは思いません。たとい、話は巧みでないにしても、知識についてはそうではありません。私たちは、すべての点で、いろいろな場合に、そのことをあなたがたに示して来ました」

この「大使徒たち」とはペテロやヨハネなどの12使徒たちのことを指すのではなく、偽教師たちのことを皮肉を込めて表現しているのである。「話は巧みでない」とは皮肉にとれば、人をうまく丸め込む話術などにたけていないという意味となり、文字通りにとればプロの雄弁家のように話には巧みではなかったという意味となる。しかし、どちらにしても彼はイエス・キリストに関する知識、神の福音の本質的な真理をわきまえる知識においては誰よりもすぐれているのであり、そのことは彼から実際に教えを受けたコリント人たちは皆知っていたはずである。

このように彼は神の熱心をもって彼らに語りかけていく。

福音を伝えることにおいて、本質的なことはテクニックでも形式でも、耳ざわりのよさでもなく、内容であり、神が私たちの救いについて啓示された真の知識なのである。

→ I コリント 1 : 21 ~ 25